
詩歌・小説の中のはきもの（第7回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

75 紳士靴の使用テストを依頼したときは、他人と間違えられてはいけないからと、宴会の座敷に、ぬいだ靴を持って上がったという人や、テストが黒い靴だったので、そのあいだ茶色の背広を着ないで過ごした、という人もいた。酒井 寛

★『花森安治の仕事』から。日本の出版物で『暮らしの手帖』くらい商品の改良改善に貢献した雑誌はないと思う。「花森は、いい読者を持っていることが、自慢だった」という。偉才を支えたのは消費者でもある読者だったことが分かる。一国の有権者に見合った政治、日本の消費者に見合った日本商品、靴という商品をより良いものに育てるために企業まかせにしていけないと花森安治は消費者に教えたのだと思う。

76 開戦五カ月後に、第一軍に「四万足」ぶんの修理材料を持った靴工100人を派出したのにつづき、第二、第三、第四軍にも靴工班が急行した。

内地から持参した修理用牛皮も不足し、靴の表底だけの修理にとどめたり、あるいは長靴、半長靴の筒革を編上靴の甲革に利用するなどの工夫をこらす師団も、出現した。 児島 襄

★『誤算の論理』から。日露戦争の時、国内の靴メーカーは夜を日につぐ軍靴生産を

したが、需要に追いつかなかった。そこで靴工兵が登場したのであった。この状態は太平洋戦争終結まで続く。小銃は重くて単発の三八式が有名であるが、靴も昭五式という形式で通した。この時期アメリカ軍は靴の仕様を4回も変え改良を加えたのに対し、日本は犬や兎、鮫の革まで動員する始末で改良どころではなかった。

77 「日本人は靴を道を歩く戸外の道具と思っているが、靴は西洋では立派な客間にも入って行くし、寝るまで沓いているものなんだ。だから靴はとても人に見られているものなんだね、土足じゃ困るんだ。君は知るまいが、西洋の女は裸になっても靴を沓いていて、バθ・タブの前迄行って、そして湯に入る。――一寸ばかり良い眺めなんだが、それはそれとして、そういう訳けだから、西洋でちゃんとした社会に入るためには靴に気を付けなさい。殆どの日本人はその点で落第だから――」 團伊玖磨

★『さよならパイプのけむり』から。1956年、パリで藤原義江からそう教えられたのだという。近ごろ余り聞かない形容だが、“バリッ”としたスタイルの人といたら、私は第一に藤原を思い出す。それにしてもバス・タブに入る女の仕種を例にとるところがいかに艶福家だったテナーらしい。

そのことをバθなどと少し気取って、さらりと書く團さんのエッセイも垢抜けている。

78 最後がスリッパだった。これもまたどれも合格品がない。軽いのは軽すぎて歩きにくいし、かぶせの部分が深いのもよくない。結局足先のところが少しあいたサンダルふうのものに落ちついた。これは足先が自由に動かせるため、ぞうり生活の長い母にとっては足袋をはくに似た感触が残っていたのかもしれないし、私が試しばきしてもこの型のものは、サイズや足の型についても融通がきくように思われた。 森南海子

★『母と私の古い支度』から。95歳の母親が入院にあたってダダをこねる。靴下は足首のゆるゆるのものがいいと言うので、みんなで足首をひっぱりあったり、茶筒や海苔缶にかぶせて伸ばす。病んだりケガをして身体の条件が最低になったときの履物は、もっとキメのこまかい配慮がメーカーには求められているのだ。

79 靴のなかに閉じこめているときは、くるぶしから下は、ひとかたまりの「足」としか意識していない。指をとってみても、一本一本を別々に動かすことはない。脱いでみると、靴のつま先の形のままに、縮かんでいたり、斜めに硬直していたりする。 岸本葉子

★『からだの事典』から。生徒の名前を覚えられない学級担任がいるというので問題になっている。学校という閉鎖社会の中で「ガキ」としていっしょくたにされている生徒が哀れだ。ところで、私たちは、著者が言うように、甲や土踏まずや踵があり、親指から小指まで5本の指があるものなのに、

ひとたび靴を履くと“ひとかたまり”の「足」にしてしまっている。哀れにも愚かな話だと思いませんか。

80 「でもまだペテルスブルグの小さな某伯爵夫人の表現が不十分ですね、足の表情がたりないのです」

そして彼は足の表情を表現した。私は、鷹のように鋭い彼の目の前で、再び〈ロンド〉を弾くために練習を重ねた。

「よくなりましたね、今回は！」

と言い、

「足の表情は出てきました。でも靴はどこです？」

彼は靴の表情も加えた。

ヴィルヘルム・フォン・レンツ

★『パリのヴィルトゥオーゾたち（中野真帆子訳）』から。「足の表情」と言ったのは作曲家で大ピアニストだったフランツ・リストである。音楽の表現に足や靴が出てくるのが日本人には奇異だが、レンツは、ベルリオーズとの婚約を解消したこともあるプレイエル夫人が、「美しいパリジェンヌがエレガントな靴をはくようにピアノの演奏をした」とも記している。

81 次はデザイン。五センチくらいのヒールの編み上げブーツにすることにした。私がリクエストしたのは二点で、つま先のカットをややスクエアにしてほしいことと、踵のラインがボコッと丸く出っぱらないようにしてほしいこと。でも、ご主人には踵のリクエストが納得できないらしい。たしかに、人間の足のラインに沿えば踵の部分は丸く出っぱるのだけれど、それが嫌なのだ。筒井ともみ

★『着る女』から。踵のアールは欧米の靴

の方が大きいというが、自分の持っている海外直輸入の靴を見るとさほどの差はない。踵の出っ張りのない靴は一見スッキリと見えるが、脱げやすい。日本人、中でも無精な人は手を使わず靴と靴をこすり合わせて靴を脱ぐので、踵にキズを付けているのが目につく。私もその部類で、踵のフィッティングのいい靴は脱ぎにくくて嫌いである。彼女はまさかそんな理由からリクエストしたのではあるまい。

82 同年兵が、上等兵殿はお前の靴をほしがっているぞと言ったりする。私は、上官と靴を交換するといった事態があってもいいと思っていた。しかし、当人ははっきりと自分でそう言うのでなければ換えてやるまいと思いきだめていた。

靴は私に馴染んでいるのである。上等兵の靴が私に合うかどうかわかっていない。むこうが言いだすまで換えてやるわけにはいかない。

私はこの男に痛めつけられた。原因は、たかが靴一足である。また、靴一足が軍隊では大問題であった。 山口 瞳

★『男性自身 困った人たち』の「軍隊」から。「お前、いい靴はいているな」と、ニヤニヤ笑いながら言うしつこい男だった。敗戦後すぐ山口瞳はこの編上靴を上等兵に呉れてやったと記している。部下の身の回りのものを取り上げようとするなど、補給線の断ち切られていた戦地での話なら分からないでもないが、国内においてもこのていたらくだったのである。最も基本的な装備である軍靴の欠乏した軍隊は軍隊といえない。

83 靴は野良仕事をする百姓女が靴のことを考えたり、靴をながめたり、あるいは

はただこれを感じたりすることがすくなくればすくないほど、それだけほんとうに靴であるのです。

マルティン・ハイデッガー

★『芸術作品のはじまり（菊池栄一訳）』から。普通の場合、靴は人の役に立つ道具なのだから、その本質は履かれているときに一層鮮明になる。だが、ハイデッガーは、ゴッホの古靴の絵から、実際に足に履かれているとき以上に、靴の道具としての有り様、本質、情念などを読み取っている。芸術作品と観ることによって別の世界を展開してみせる独特の芸術論を展開している。靴屋である私はそんな芸術論よりも「本質」に興味がある。裏方、いや地味ではあるが文句ひとつ言わない古女房のような靴の親しさ！道具自体の持つ素晴らしい存在感！

84 靴を履く日など来るかと思いいしに
今日卒業すファーストシューズ
半年で買い換えてゆく子の靴に

我が感慨も薄れてゆかん
俵万智

★『木馬の時間』から。肉塊のような生き物がこの世に現われたとき、靴を履くなどというのは、気の遠くなるような将来のことに思え、果たしてそんな日が来るのだろうかと思案としていた母親。そんな思いで育てた我が子の最初に履いた靴がきつくなった。親の喜びば更につづくのだが、子の成長に親のさまざまな思いが追いつかない。靴は体重や身長よりもたしかに成長の目盛になっているのだ。